

「世界恐慌」(上・下)

ライアット・アハメド(著)、吉田利子(訳)

筑摩書房 2013年9月15日刊

本書は第一次世界大戦後の世界金融再建について、先進国の中央銀行総裁たちがいかに努力をしたか、そして、1929年のウォール街での株式市場の大暴落とそれに続く世界恐慌がどのようにしてもたらされたかを、重層的に描いた名著だ。2010年にはピューリッツァー賞(歴史書部門)を受賞している。

本書で中心的に描かれている4人の金融家、イングランド銀行総裁モンタギュー・ノーマン、ニューヨーク連邦準備銀行総裁ベンジャミン・ストロング、フランス銀行総裁エミール・モロー、ライヒスバンク総裁ヒヤルマール・シャハトは、当時の金融界の重鎮であり、国際金融政策を取り仕切っていた。事後的に見れば、彼らは多くの政策ミスを犯したが、本書ではその経緯が詳細に記述されており、貴重な記録となっている。

本書の論点やエピソードは多岐にわたるが、以下の2点が重要である。第一に、大恐慌の原因は第一次大戦後、戦勝国側が敗戦国ドイツに課そうとした賠償金問題の処理とその意思決定のまずさにあり、その責任は、パリ講和会議に出席した政治家にあるということである。実際、本書でも繰り返し描かれているが、1920年代はこの賠償金問題の解決に費やされ、国際関係が悪化の一途をたどった。

第二に、1929年のウォール街の大暴落発生後のアメリカ連邦準備制度理事会(FRB)の緊縮的な政策が、大恐慌をもたらしたという説明が、ミルトン・フリードマンなどからされてきたが、本書ではその原因をさらに踏み込んで検討している。事実としては、ニューヨーク連銀総裁のジョージ・ハリソンとFRB議長ユージン・マイヤーの2人は積極的金融政策の導入を主張していたにもかかわらず、公開市場政策会議、連銀理事会、公開市場政策執行委員会の三つの組織が互いを牽制し合った結果、金融緩和は中止されてしまった。これは当時の連銀の組織的な欠陥であると見ることができるだろう。

本書は、1930年代のデフレからの脱却についても議論が及んでおり、今日のマクロ経済政策に対して持つ含意は極めて大きい。